

子どもが自ら選び取る運動会に

前川 良太

つばさの運動会は、特別に披露するための練習をして、成果を発表する場ではなく、ふだんの遊びや生活の延長にある「子どもの姿」をそのままを表現する場にしたいと考えています。だからこそ、まずは「今年の運動会はどんなことしたい?」と子どもたちに問いかけるところから、つばさの運動会づくりはスタートするのです。「走りたい」「踊りたい」「友だちと一緒に○○したい」と、出発点はそれぞれの子どもたちの願いと自己決定です。でも、それは決して「一人でやり抜く力」を試すものではありません。「どうしようかな」「一緒にやれへん?」と友だちと声をかけ合ったり、大人に背中を押してもらったりしながら、自分なりの“運動会でやりたいこと”を選び取っていきます。

時には迷ってしまう子もいます。やりたい気持ちはあっても、うまく言葉にできなかったり、自信が持てなかったりすることもあります。そんなときに、友だちの姿に刺激を受けたり、「どういう自分でやりたいのか」と温かい大人の問いかけがきっかけで、子どもの気持ちはまた動き出すことだってあります。または逆に「やっぱりやめておく」と立ち止まることもあります。けれど、次の日になって「今度はやってみたい」と挑戦したりすることも。そうした流れややり直しも、子どもにとって大切な経験です。そうした流れを受け止めることこそ、子どもの主体性を大切に保育するということだと考えています。



主体性や自己決定というと、「自分の力だけで発揮したり、自分で決めたことは自分の力で最後まで頑張り抜くこと」と思われるがちです。でも、子どもの主体性はいつも関係の中にあります。友だちと一緒に頑張れる、誰かに支えられているから安心して選べる。子どもはそうやって、自分の気持ちを少しずつ確かめています。その積み重ねが「自分で決められた」「私の運動会」という実感を生むのです。

だからこそ私たちは、「できた」「できなかった」や「勝った」「負けた」だけで子どもを見ないようにしています。大切なのは、子どもたちが仲間と関わり合いながら、自分の一步を選んでいるかどうかです。勇気をもらったり、励まし合ったり、時には支えられたり、そうしたやりとりが、

子どもの育ちを力強く支えています。



当日の競技や演目は、大人から見ると一つの「成果」に見えるかもしれません。でも、その背景には、日々の生活の中での小さな選択や友だちとの支え合いが積み重なっています。運動会は「特別な本番」ではなく、そうした毎日の歩みが自然にあふれ出る場なのです。

どうか当日は、わが子の頑張りや結果だけでなく、仲間と一緒に迷い、考え、挑戦している姿に目を向けてみてください。立ち止まりながらも、もう一度自分の気持ちを確かめて選び直す。その姿こそが、子どもにとっての大切な成長の証です。みなさんと一緒に、その尊さを喜び合える運動会になればと願っています。